

第 112 回 歴史リレー講座「古代の烽とぶひを再現する！」相原 嘉之氏 (R6.1.21)

王寺町は 2022 年度に引き続き、2023 年度も古代の烽の実証実験「みんなでつなぐ明神山烽火プロジェクト」を実施しました（昨年 12 月 9 日）。明神山（273.6m）に烽火があったという記録は見つかっていませんが、江戸時代には米相場の情報を伝達していたという話が残っています。今回は前回のリレー講座（R5 年 4 月）のおさらいも兼ねて実験の結果報告をしましょう。

そもそも烽とは、情報を煙のリレーでいち早く都に伝える手段です。飛鳥時代に起きた白村江の戦い（663 年）において日本は百濟復興軍とともに唐・新羅連合軍と闘いましたが、結果は大敗。これによって、日本は国防に対する認識の甘さを痛感したのか、翌年には対馬、壱岐、筑紫などに防人と烽を設置したと『日本書紀』に記されています。都のある飛鳥から最も近い烽火台は高安山にあり、難波からの情報を伝えていましたが、都が平城京に遷ると同時に高安山は役目を終え、生駒山にその座を譲りました。

のろしの表記は古代では烽（すすみ、とぶひ）、中世以降は狼煙（ろうえん、のろし）などが使われました。また、軍事に関する取り決めを網羅した『養老軍防令』は、烽についても細かなルールを定めています。例えば、烽火台を設置する間隔は 40 里（約 21km）、烽火台ごとに 4 人の烽火子を配置すること、昼間は烟火（けむり）を夜間は火を放つこと、使節船か敵の来襲かによって打ち上げの数を変えること、烽の管理者数、烽の構造、そして煙を上げる間隔は 25 歩（約 45m）などです。また、万が一烽に不具合があった場合は、烽火子が次の中継点まで走って報せなければなりません。ちなみに、高安山と飛鳥の距離はおよそ 20km。これは『養老軍防令』のルールにほぼ則った数字です。

烽について考察するうえで地名の存在も忘れてはなりません。奈良には火山、畝火山、火振山、飛火野など烽を連想させる地名が多く残っています。これらすべてが烽火に関係するとは限りませんが、実際、九州や兵庫県の山陽道では、幹線道路沿いに烽火に関する地名が 8~12km 間隔で残っています。近畿圏内には「ヒフリ」という地名が多くみられ、なかでも飛鳥の藤原京南部に集中しています。

今回の実験は中継地点を新たに設置し、明神山、葛城市のしあわせの森公園（明神山から約 9km）、明日香村の甘檉丘（葛城から 10km）の 3 烽で行うことになりました。これは次烽までの間隔は 10km が妥当だという前回の結果を踏まえたものです。当日は晴れたうえに風の影響も少なく実験には絶好の日和。王寺町長、葛城市長、明日香村長を烽長に迎え、烽火子は燃焼材準備係、監視係、着火係、計測係に分かれて計 4 回烽火を上げました。のろし台は王寺工業高校に制作していただいた第 2 世代ドラム缶ロケットストーブ。前回のものよりも煙突の上部（排煙部）を狭め、長さを延長したためより高く煙を上げることに成功。燻蒸すのこに工夫を凝らしたことも功を奏しました。

次烽までの平均伝達時間は前回の実験では着火から確認まで約 6 分でしたが、今回は 9 分強かかりました。計算上では、伝達元の博多から明日香村まで半日程度で伝達できることとなります。また、煙をより認識しやすいように事前に次烽の正確な位置を確認しておきました。次烽の背景が空ではなく緑色の葛城峰だったため識別しやすかったという声や、風もまったく無いよりは多少あったほうが煙を認識しやすいのではないかという意見もありました。

一方で、燃焼材を固定する網目を細かくしたため上昇気流が不調であったこと、仮に明神山を前烽から見るとどう見えるかなどが課題として挙げられました。私としては大阪の難波宮からどこかの山を經由して明神山に伝達できれば…と密かに考えています。日本遺産の竹内街道ルートと部分的に重なるので興味深い結果を得られるかもしれません。いずれにせよ、文献史料や考古学だけでは計り知れない事実を実験によって導き出すことは非常に意義のあることです。